

2. 事業の概要と成果

(1) プロジェクト目標 の達成度 (今期事業達成目標)

プロジェクト目標である「トリンコマリー県帰還民再定住エリアの主産業である農業の基盤となる農業水利施設(小規模貯水池、農業用水路、農業用井戸)の修復および建設を農民組合が行い、耕作可能面積を広げ、また米以外の農作物の導入等により、農業を営む住民が多様な収入源を得るようになる。」に対して、農民組合が農業水利施設の修復を行い、耕作可能面積が広がった。また、対象地域の農家が米以外の農作物からの収入源を得るため、OFC (other field crops) の種子生産、オーガニック野菜などの農作物の生産促進を行った。

これにより、上位目標「トリンコマリー県内の再定住地域において、帰還民の収入向上と収入の安定により持続可能な生計が立てられる」に対して、事業開始前と終了後において、平均収入(年間)の聞き取り調査において、表1のような結果を得た。

表1: 事業開始前後における平均収入

事業内容 ／平均収入(年間)	事業開始前の 平均収入	事業終了後の 平均収入	事業前後の 平均収入差
農業水利施設の修復 と設置	Rs.114,539	Rs.125,749	+Rs.11,210
OFC 種子栽培の導入	(食用)Rs. 26,216	Rs.50,999	+Rs. 24,783
オーガニック栽培の 導入	Rs.0 *1名を除く	Rs. 51,971	+Rs.51,971

小規模貯水池の修復による米の平均収入については、1年次は前年から平均で45,009ルピー(+37%)の増加であったが、2年次は11,210ルピー(+約10%)の増加となり例年に比べて小幅な増加となった。

この結果の原因は、2021年5月にスリランカ政府(以下 政府)が突然、全国的に有機農業に切り替えると宣言し、化学肥料や農薬、除草剤などの輸入を禁止したことが大きく影響している。これらを輸入禁止にしたことで、2021年10月頃から始まる雨季の米の栽培時に、今まで政府が無償で配布していた化学肥料が配られず、農薬や除草剤についても農業資材店からの入手が困難となった。

このため、今まで完全に化学肥料に依存した農業を行っていた農家は、有機農法における有機稲作の手法や技術、有機堆肥の施肥方法や適切な施肥時期を知らないまま収穫期を迎える結果となった。現在農業局が、2021年-2022年雨季の全国の収穫量について集計中であるが、トリンコマリー県においては、米の収穫量が前年度と比較して60%程度に減少していると報告を受けている。このように、全体的な米の収穫量が減ったことで買取価格が上昇し、農家はどうか収入を得ることができた。

OFC種子栽培については、化学肥料の輸入停止措置の前に必要資材をすべて手配し農家に配布していたため、収穫に大きな影響を受けず、ほとんどの農家が高品質な種子を生産し政府公認の種子として認証を受け、高価格で販売することができた。また、種子用としての品質が保てなかった収穫物は食用として販売されたが、政府により化学肥料だけでなく食料品などの輸入も制限されており、食用としても例年以上の価格で販売ができたため、収入向上の一助となり、かつ食料の国内自給にも貢献した。

オーガニック栽培から得る収益についても、上記の化学肥料の輸入停止により、本事業を通じてオーガニック栽培の技術を学んだ農家は、周辺農家と比較しても順調に野菜栽培を続けることができ、販売できる品質を保つこ

	とができた。さらに営農トレーニングに参加した多くの農家は、農作業だけでなく、販売活動にも興味を持ち始め、自主的にファーマーズ・マーケットを開くなど、積極的に販売する姿が見受けられた。 また、本事業を通じて得た知識や技術を用いて、有機堆肥や液肥、自然農薬、野菜の苗などにも商機があると理解した農家は、農作物が収穫できない時期にも収入を得る機会を得ている。 2 年次では、政府の有機農業への方針転換とスリランカ経済破綻による物価の高騰が農家に影響し、特に農家の主収入である稲作においては今まで化学肥料に完全に依存した農業しか行ってこなかったため、大きな損失を受けた農家も少なくない。しかしながら、本事業において、収入源の多源化を行ったことにより、収入の安定化に貢献できた。特にオーガニック栽培の事業に参加した農家は、技術トレーニングで得た知識を稲作にも活用して、周辺農家よりも高い収穫量を得た農家もいた。 また、有機農業への方針転換と経済危機は、農家の収入だけでなく、国全体の食料自給にも大きく影響し、食料品の不足による価格高騰にもつながっている。このような状況において、本事業の支援内容は、食料の安定供給の確保に大きく貢献している。 (今期事業達成目標) 先行事業に続き、農民組合が新たな農業水利施設 7 施設を修復し、本事業に参加する裨益者が米以外の農作物栽培のさらなる拡大を行う。また、地元で手に入る資材を効率的に活用した有機農法を実践するようになり、有機農法による収入向上の成功事例が普及する。
(2) 事業内容	活動 1) 農業水利施設(小規模貯水池、農業用水路、農業用井戸)の修復と設置 1-1) 小規模貯水池と用水路の修復 1-1-1. 工事の実施 トリンコマリ県内の再定住地域を中心に、7 つの農民組合が所有する小規模貯水池 7 箇所の修繕を行った。 1-1-2. 農民組合の主体的参加による長期的維持管理の促進 農業開発局が灌漑局と共同で、小規模農業用貯水池の適切な維持・管理方法について、ワークショップを開催した。 1-2) 農業用井戸の設置 1-2-1. 工事の実施 トリンコマリ県内の再定住地域を中心に、予定されていた 7 か所の内 6 か所においては当初の計画どおり農業用井戸を設置した。プーバラサンクラムにおいては、変更申請を行い設置する井戸を 2 基に変更し、合計で 8 基の井戸を設置した。2022 年の乾季はこの井戸を活用して、OFC 栽培を行う予定としている。 1-2-2. 農民組合による長期的維持管理の促進 提供した揚水ポンプのメンテナンス指導は、前年度同様、ポンプメーカーより指導員を招いて指導を行った。組合内で使用のルールを決めて適切に管理していく。 活動 2) 米以外の作物栽培の導入 2-1) 米以外の穀物・豆類等(OFC)栽培導入の促進 本年度は、7 つの農民組合の 10 名(合計 70 エーカー程度)をターゲットとし、需要の高い高品質の種子生産を行った。政府が認証している認証種子を生産するために、必要となるトレーニングやコンサルテーションの実施、

また種子および化学肥料、放牧されている家畜などからの被害を防ぐための有刺鉄線などを提供した。

現在、農産物を含め多くの物資の輸入が規制されており、種子用、食用ともに、需要が非常に高く、買取価格も高騰しているため、ほとんどの農家が事業を通じて十分な収入を得た。政府の種子認証サービス局からも、本事業が需要の高まる高品質な種子の増産に大きく貢献したことが認められ、3年次分の種子も優先的に確保してくれた。

2-2)オーガニック栽培の導入

対象農民組合員の組合員が所属する村落および近隣村落から、有機農業に対して意欲がある希望者を募り、インタビュー及び個別訪問を行い、農家を選出した。選考においては、寡婦、障がい者、脆弱なカーストに所属する人など、社会的脆弱性の高い農家を優先的に選出した。

また、1年次同様に、Good Market 有機野菜認証取得に対するアウェアネス・トレーニング、初回のオーガニック野菜栽培研修オーガニック・モデルファームでの実地研修の3つの研修に参加した農家を最終的な支援対象有機農家とした。

上記条件で選出した農家に対し、オーガニック野菜栽培技術研修(それぞれの野菜の適切な栽培方法の説明、育苗管理、液肥の作り方、剪定方法など)、技術コンサルティング訪問、ビジネストレーニング(会計・記録、マーケティング手法、コンサルティングなど)を行った。また、野菜や果樹の種苗、コンポストヤード、小規模灌漑設備(スプリンクラー等)、鳥獣害被害対策フェンス等を含む有機栽培補助用具の農機具支援を行った。

機材の提供にあたっては、効果効率を考慮するだけでなく、有機認証で推奨されている生物多様性向上や環境保護、節水などが実現できる物資を選択し提供した。また、配布するだけではなく、その技術を活用する利点やどのような働きがあるかなどを農家が理解できるように一軒一軒を周り、丁寧に説明を行った。

また、今まで村にやって来る仲買人の言い値でしか野菜を売ってこなかった農家が、ビジネストレーニングの一貫として行った実践マーケット・トレーニングを通じて、実際に販売活動を自ら行った。直接消費者と触れ合うことで、消費者からポジティブなコメントを聞いて農家としても自信がつき、さらには要望や意見も聞き、それらを積極的に取り入れる意識になったと、トレーニング後の反省会で多くの農家が話してくれた。実践マーケット・トレーニングが、多くの農家の有機農業に対する取り組み方や姿勢を大きく変えるきっかけになった。

また、一年次の農家を対象として、Good Market の有機認証査定前の説明会を行い、準備ができた農家から順番に Good Market からの技術員と消費者代表からの査定を受け、事業終了時の2021年12月末地点で合計38名の農家が有機認証を取得した。これらの有機認証を受けた農家に対してネットワーク・トレーニングを行い、それぞれの地域でグループを形成しSNSやネットワークアプリで連絡を取り合い、情報共有を行っている。また、変更申請により3年次の農家に対する上記アウェアネス・トレーニングと農業トレーニング1回分を2年次に実施した。

(3)達成された成果

1. 農業水利施設の適正な運用が可能になる。

1-1) 小規模貯水池および用水路の修復工事により、灌漑用の水の貯水量が増加することで耕作可能な面積と期間が広がり、農作物の収量が増える。

指標 1-1)小規模貯水池および用水路の整備によって耕作面積が 1.5 倍以上に増え、雨季の米の収穫量が 20%に増える。また、事業期間終了後も適切な状態を維持するために、適正な維持管理方法の知識を身につける。

耕作面積においては、表 2 のように耕作可能面積は全体で、約 1.5 倍に拡大している。

表 2: 指標 1-1)耕作可能面積の比較

小規模貯水池の名称	事業前 耕作可能面積	事業後 耕作可能面積	増加面積
コランクラム	89.00 エーカー	120.00 エーカー	31.00 エーカー
コドゥッカクラム	31.50 エーカー	39.50 エーカー	8.00 エーカー
トゥバラクラム	87.25 エーカー	91.00 エーカー	3.75 エーカー
プーバラサンクラム	54.00 エーカー	98.00 エーカー	44.00 エーカー
ヴェランクラム	109.00 エーカー	129.00 エーカー	20.00 エーカー
ポッタクラム	38.00 エーカー	45.00 エーカー	7.00 エーカー
コーンウェワ	1.00 エーカー	89.00 エーカー	88.00 エーカー
合計	409.75 エーカー	611.5 エーカー	201.75 エーカー (149%増)

表 3: 指標 1-1)2020 年、2021 年度マハ期(雨季)の米の収穫量の比較

小規模貯水池の名称	2020 年度収穫量	2021 年度収穫量	増加率
コランクラム	1,618 袋	1,013 袋	-37.4%
コドゥッカクラム	163 袋	-袋	-%
トゥバラクラム	1,381 袋	786 袋	-43.1%
プーバラサンクラム	1,902 袋	737 袋	-61.3%
ヴェランクラム	986 袋	1,555 袋	57.7%
ポッタクラム	631 袋	705 袋	11.7%
コーンウェワ	-袋	373 袋	-%
合計 (1 袋=68kg)	6,681 袋	5,169 袋	-22.63%

コーンウェワは、貯水池の修繕工事自体はすべて完了しているが、貯水池だけでなく、その農地も完全にジャングルに埋もれていたため、耕作可能になった面積は 1 エーカーから 89 エーカーに増えてはいるが、今回の雨季の稲作に開拓が間に合わず、次の乾季から稲作を開始する予定である。

米の収穫量はヴェランクラムが 57.7%増、ポッタクラムが 11.7%増と収穫量を大きく増やした組合もあるが、全体の平均は 22.6%減であった。なお、農業局が出しているトリンコマリー県内の収穫量の平均が約 30%~40%減(3 月 24 日現在)と比較しても、減り幅を抑えることができたと言える。今回の雨季は上述のように、政府の政策の失敗により、化学肥料を始め除草剤や農薬が手に入らず、耕作をしても損失が出る可能性があり、稲作自体を行わなかった農家も少なくない。また、地域ごとに稲の発育状況を見てまわった際に、特に土壌がほぼ砂に近い田圃では、稲よりも草の方が多く目立ち、稲が 30cm ほど成長して黄色くなってしまっている農地が多くあった。

また、コドゥッカクラムにおいては、工事の遅れが原因となり、2022 年 1

月後半になって播種を行った。貯水池には十分に水があり、井戸の水も活用して稲を育てていたが 30cmほどで成長が止まり枯れてしまい、収穫ができなかった。現在、原因究明中であるが、種籾の品質が悪かった、または海のすぐそばの農地であるために塩害が出たなどの要因が考えられる。コドゥッカシランの農民組合は、2022 年 3 月ごろから始まる乾季にその分を取り戻すべく、OFC の生産を現在検討している。

トゥバランシランに関しては、昨年までの収穫量が非常に多かったため、結果的にはマイナスとなってしまった。しかし、修繕した貯水池の貯水量が増えたため、このマイナス分を取り返すべく、農民組合は今までやったことがない乾季にも稲作と OFC 栽培の準備を進めている。

プーバラサンシランは、土壌が砂地であるため、肥料もちが悪く、大量の化学肥料を必要とするが、今回政府から配布されたものが液肥であったため、いくら液肥をまいても作物が吸収する前に砂が養分を吸収し流してしまいうため、稲に十分な栄養が行き渡らず稲よりも草の方が育ったために収穫高が減ってしまった。乾季は、貯水池の水や農業用井戸の水を使って、砂地にも適応力がある落花生などの OFC の栽培を行う。

ヴェランシランは、前年に配られた化学肥料を保管していた農家が多かったため、収穫量も大幅に増加している。さらに貯水池修繕により貯水量が上がったため、乾季における初めての稲作を開始した。

このように収穫高は全国的に大幅に減少したが、需要が供給を上回っているため、米の買取価格が上昇し、地域差はあるが、全体としては、表 4 のとおり 34%の増加率となった。

表 4: 各貯水池における稲作による収入比較

小規模貯水池の名称	2019 年度収入	2021 年度総収入 見込み	増加率
コランシラン	Rs.4,241,690	Rs.4,880,900	15.07%
コドゥッカシラン	Rs.492,600	—	—%
トゥバランシラン	Rs.3,770,825	Rs.3,462,817	-8.17%
プーバラサンシラン	Rs.5,131,074	Rs.3,439,240	-32.97%
ヴェランシラン	Rs.2,417,625	Rs.6,246,410	158.37%
ポッタシラン	Rs.1,470,670	Rs.3,514,896	139.00%
コーンウェワ	—	Rs.1,970,766	—%
合計	Rs.17,524,484	Rs.23,515,029	34.18%

1-2) 小規模貯水池の近辺に設置された農業用井戸で乾季にも灌漑ができるようになる。

指標 1-2) 農業用井戸の整備により、乾季の耕作面積が全体で 21 エーカー以上増える。また、事業完了後も適切な状態を維持するために、適正な維持管理方法の知識を身につけている。

表 5: 井戸の設置により増加した乾季の耕作面積

小規模貯水池の名称	耕作面積の増減	指標達成度
コランクラム	+ 5.0 エーカー	167%
コドゥッカクラム	+ 4.0 エーカー	133%
トゥバラクラム	+ 5.0 エーカー	167%
プーバラサンクラム	+ 9.0 エーカー	300%
ヴェランクラム	+ 8.0 エーカー	267%
ポッタクラム	+ 4.0 エーカー	133%
コーンウェワ	+ 6.0 エーカー	200 %
合計	+ 41.0 エーカー	195%

農業用井戸の設置によって、表 5 のとおり合計で 41 エーカー分の耕作面積が増え、今後、ヤラ期(乾季)に OFC などのその他の農作物の栽培が可能となり、ポンプなどのメンテナンス方法も習得した。

小規模貯水池の修繕による貯水量の増加と、農業用井戸の設置により、今まで水が十分確保できなかったために行ってこなかった乾季の稲作および OFC 栽培を行う予定である。

2. 米以外の収入源の確保

2-1) 米以外の穀類・豆類等の OFC (Other field Crops) 栽培導入により副収入を得る。

指標 2: 米以外の農産物から平均 15,000 ルピー以上の副収入を得られる。

次の表 6 のとおり、種子用・食用ともに、平均 15,000 ルピー以上の副収入を得た。

指標 2-1) 各小規模貯水池に土地を持つ農家 10 世帯が種子用の OFC 栽培を導入する。

表 6 : OFC 栽培による収入

小規模貯水池名称	OFC 種子栽培 導入農家数	OFC 種子として 販売した農家数	食用として 販売した農家数
コランクラム	11	9	2
コドゥッカクラム	12	0	7
トゥバラクラム	9	0	4
プーバラサンクラム	14	4	10
ヴェランクラム	14	2	12
ポッタクラム	9	3	5
コーンウェワ	19	6	10
合計	88	24	50
		種子用	食用
平均収益		Rs.82,088	Rs.51,577

7 組合各 10 世帯をターゲットにして希望農家を募り、当初 88 件の農家がトレーニングなどを受け種子の提供を行った。結果としては、表 6 のとおり、種子用として認証を取得できた農家は 24 件であった。50 件の農家は種子用としての品質に達することができず、食用として販売を行った。

しかしながら、現在の経済危機による輸入規制によって例年に比べても食糧需要の高さから、食用であっても高価格で取引されているため、指標を大きく上回る収入を得ている。またこれらの収入から、本事業にて提供した種子代や肥料代、運送費などを差し引いても、20,000 ルピー以上の「利益」が出た。

なお、コドゥッカランラムは海沿いにある脆弱なコミュニティで、12 農家が挑戦したが、5 農家は水の管理ができずに収穫に至ることができず、残りの 7 農家は食用として販売を行った。

また、トゥバラランラムは、Covid-19 によるエリア・ロックダウンになってしまった際、深夜に窃盗団が村を襲い、金品だけでなく畑にあった有刺鉄線まで盗まれてしまったため、朝方、農地に放牧されている家畜が入ってしまい、順調に成長していた豆類が食い荒らされ、結果的に土中にあった落花生だけがどうにか収穫できた状況であった。このため落花生栽培農家だけが食用として販売することができた。

上記 2 つの組合以外は、種子認証を受け、食用よりもはるかに高価格で買い取ってもらえたため、今後も種子生産を続けたいという農家も多い。農業局も高品質な種子の需要に応えるため、種子生産の促進を行っているため、担当の農業指導員が継続対応している。

2-2)オーガニック栽培として付加価値をつけて販売することで、副収入を得る。

指標 2) 米以外の農作物から平均 15,000 ルピー以上の副収入が得られる。

表 7 のとおり、組合ごとに多少の差はあるが、どの組合も、一律で 15,000 ルピー以上を達成している。

表 7：有機農作物からの平均収入

貯水池名称	2020-21 年における 有機農作物からの平均収入	指標達成度
コランラム	Rs. 28,287	188.6%
コドゥッカランラム	Rs. 17,919	119.5%
トゥバラランラム	Rs. 103,873	692.5%
プーバラサンラム	Rs. 43,465	289.8%
ヴェランラム	Rs. 85,419	569.5%
ポッタラム	Rs. 35,877	239.2%
コーンウェワ	Rs. 48,958	326.4%
平均	Rs. 51,971	346.5%

大きく伸びている地域は、その地域や隣近所でモチベーションの高い農家が中心となってグループを形成しつつあり、人が集まるイベントがある際などに簡易の野菜販売所を開き、徐々に活動を広めている。

特にトゥバラランラムは、若い農家が家族総出で有機農業に取り組んでおり、トリンコマリ県有機農業部門で 1 位を獲得した。(第 2 位を獲得したのは、1 年次に支援した農家) この農家を中心として、周辺農家全体が底上げされている。また、このエリアを担当している農業指導員や経済開発オフィサーとの関係構築する機会を設けたため、農家と政府機関との連携がうまく取れたことが、大きな成果が上がった原因と思われる。

またヴェランラム(ムスリム中心の民族混在エリア)とポッタラム(タミルのみ)は、コミュニティ的にも異なる民族であるが、地理的にも近いため、時折トレーニングなどを一緒に行うこともあった。ヴェランラムの農家の

内、1軒の農家がビジネス・トレーニング時に、代表で地域の病院の前で有機野菜販売を始めることを決め、地理的にも近いポッタクラムの農家もこの販売所に野菜を卸すようになった。当初は、毎週火曜と木曜の週2回の出店であったが顧客からのニーズが高く一日約5,000～15,000ルピーの売り上げ、利益は1,000～5,000ルピーあり、現在は毎日出店している。

指標 2-2-a) 各7つの組合において、20世帯の農家を選抜し、合計140世帯に研修を実施し、内10%(14世帯)以上の農家がオーガニック栽培を実践する農家となる。

全7つの貯水池に所属する組合員が住む近隣村落から、有機農業に挑戦したい農家を幅広く募集し、194名が当初トレーニングに参加したが、必要なトレーニングに参加して、実践した農家数は表8のとおり94世帯となった。

現在スリランカでは、農化学資材が入手困難な状況であるため農家は農業技術トレーニングや営農トレーニングで学んだ内容を活用して、有機農業を継続し生計向上につなげている。

表8：オーガニック実践農家数

貯水池名称	オーガニック実践農家数 終了時／中間報告時／当初参加農家	オーガニック実践農家 ／当初参加農家数
コランクラム	18／22／41 世帯	43%
コドゥッカクラム	9／13／15 世帯	60%
トゥバラクラム	10／11／23 世帯	43%
プーバラサンクラム	11／17／28 世帯	39%
ヴェランクラム	18／25／40 世帯	45%
ポッタクラム	12／14／22 世帯	55%
コーンウェワ	16／16／25 世帯	64%
合計	94／118／194 世帯	48%

2-2-b) 有機完熟コンポストの生産トレーニングを受け、生産支援を受けた農家全員が地域で手に入る資材を使ったコンポスト生産を開始し、その内15%(21世帯)が他の農家への販売を開始する。

コンポスト生産においては、表9のとおり、実践農家数94世帯のうち90世帯でコンポスト生産を行っている。聞き取り調査では、販売までに至った農家は24世帯となっている。トリンコマリーは、スリランカの他の地域と比べても、ほとんどの資材が無料または大変安価、かつ簡単に手に入るため、どの農家も有機堆肥や液肥作りには今も熱心に取り組んでいる。

表 9：コンポスト生産農家数と販売に至った農家数

小規模貯水池名称	コンポストを販売した農家数／ コンポスト生産農家数	販売に至った 農家の比率
コランクラム	3／17 世帯	18%
コドゥッカクラム	3／8 世帯	38%
トゥバラクラム	2／10 世帯	20%
プーバラサンクラム	6／9 世帯	67%
ヴェランクラム	4／18 世帯	22%
ポッタクラム	4／12 世帯	33%
コーンウェワ	2／16 世帯	13%
合計	24／90 世帯	27 %

2-2-c) オーガニック栽培実践農家が市場に「オーガニック野菜」として、農作物を卸して、販売される。

1 年次の農家中、38 件の農家が 2 年次に有機認証を取得し、卸販売と直接販売を行っている農家は、38 世帯中 19 世帯であった。他 17 世帯の農家は、学校などの施設を含め、直接販売のみを行っている。残り 2 世帯の農家は、健康状態が悪化または最近まで出稼ぎに他県に出ているため栽培ができていなかった。

現在、化学肥料や農薬が入手困難であるため、スリランカ全土の農家が有機栽培または減農薬栽培を行っている。このため、有機認証を取得している野菜（オーガニック野菜）と一般に出回っている野菜との「付加価値」という点においては差別化が難しい。しかしながら、農家からの聞き取り調査によると「有機認証を取得していない農家が収穫した野菜は、害虫被害、生長障害や病気などによって、かなり見た目が悪く、小さいものが多いため、地元の八百屋に持ち込んでも買い取ってもらえないケースが多いが、本事業に参加した農家の野菜は大きさも十分で、見た目も良いため、高額で買い取ってもらえる。」という意見もあった。

また Covid-19 のパンデミックにより地産地消の流れができ、卸販売から直接販売に切り替えるなど、それぞれの農家で地理的条件などを考慮し、ターゲット・マーケットや販売方法を考えて継続して利益を上げている。

2 年次の農家は 94 世帯中 90 世帯が販売を行っている。上述（(2-2) 指標 2）に記載の通り、農家の中にはグループを形成し、郡事務所や村事務所などに人が集まる日に青空市場などを開催して、消費者にオーガニック野菜として直接販売を行っているものもある。なお、2 年次の農家は 3 年次に有機認証を取得する予定である。

表 10：オーガニック野菜として（卸）販売を行った農家数（2 年次）

小規模貯水池名称	野菜を販売した農家数／ 事業終了時の農家数	販売を行っている 農家の比率
コランクラム	16／18 世帯	89%
コドゥッカクラム	9／9 世帯	100%
トゥバラクラム	10／10 世帯	100%
プーバラサンクラム	10／11 世帯	91%
ヴェランクラム	18／18 世帯	100%
ポッタクラム	12／12 世帯	100%
コーンウェワ	15／16 世帯	94%
合計	90／94 世帯	96%

「持続可能な開発目標(SDGs)」に該当する目標における成果

目標 1：あらゆる場所であらゆる形態の貧困に終止符を打つ

ターゲット 1.5：2030 年までに、貧困層や脆弱な状況にある人々の強靱性（レジリエンス）を構築し、気候変動に関連する極端な気象現象やその他の経済、社会、環境的ショックや災害に暴露や脆弱性を軽減する。

本事業地域は内戦帰還民の再定住地域及び周辺のコミュニティを対象としており、スリランカ国内においても特に社会的脆弱性の高い人々が居住している。その中でも民族バランスに配慮し特に脆弱なカーストコミュニティ、再定住者の多い地域、腎臓病罹患率の高い人々の居住地等を選定している。そういった人々のレジリエンスの構築及び気候変動の影響下での暴露や脆弱性軽減に貢献した。複数の農業収入を確保することで生計の安定だけでなく、経済危機や有機農業への方針転換による全国的な食の安全に対して、食糧自給率の向上に貢献した。

目標 12：持続可能な消費と生産のパターンを確保する

ターゲット 12a：開発途上国に対し、より持続可能な消費・生産形態の促進のための科学的・技術的能力の強化を支援する。

OFC 種子生産事業において、高品質な種子の生産促進を行い、持続可能な農業、食の安全に貢献した。また、農家に対し有機農業普及事業を通じて、農薬や化学肥料といった人の健康や環境への悪影響をもたらすものをすべて自然由来の自然農薬やコンポストなどに置き換え、化学物質や廃棄物の大気、水、土壌への放出を軽減し、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに対する意識を持つように働きかけた。

目標 13：気候変動とその影響に立ち向かうため緊急対策を取る

ターゲット 13.1：全ての国々において、気候関連災害や自然災害に対する強靱性（レジリエンス）及び適応の能力を強化する。

近年、スリランカは気候変動の影響による干ばつ及び局所豪雨による洪水被害に見舞われている。農業用水利用施設の修繕・建設により、干ばつ対策として生活用水や農業用水の確保、洪水対策として堤防決壊や洪水吐からの排水が通る洪水路の氾濫等による農作物への対策強化が行われ、自然災害に対するレジリエンス及び適応能力の強化に貢献した。

(4)持続発展性

農業用水利施設の修繕・建設は、所有者である農民組合が主体となつて、計画実施し、さらに適切な管理方法についてもワークショップを行うことで、構造的な基礎知識を得て、より適切な維持管理が期待される。

OFCの種子栽培においては、今後も種子栽培農家として継続できるようにトリンコマリー農業局と種子認証センターと農家をつなぎ、継続していく。

オーガニック栽培に関しては、農家からの反発が非常に高いものの、現在の政府としては、有機農業を続けていく方針であるため、引き続き有機農業に対する支援のニーズは非常に高い。特に、今まで慣行農業に対する知識や技術を学んでいる農業指導員が多く、有機農業へ突然切り替わったため、農家にアドバイスを求められても答えられない農業指導員が多い。このため、本事業に参加した農業指導員は、より熱心にこの機会を利用して一緒に学び、農家への対応を行っている。特に熱心に事業に参画している指導員が担当するエリアでは、トレーニングで習った内容をすぐに実践する農家が多い。これらは、弊団体のスタッフの毎日のフォローアップ訪問だけではなく、農業指導員からのフォローアップも加わった結果であると考えられる。本事業を通じて、有機農業の経験や知識を蓄積した農業指導員の中には、それぞれの担当地域で、本事業の裨益農家以外の農家へ本事業で推奨している日本式のコンポスト生産の手法や病害虫対策のテクニックなどを広めるためのワークショップなどを開催し、担当地域の農家へ有機農業の啓蒙普及活動を行っている。

また本事業でオーガニック栽培を始め、販売を積極的に行っている農家が増えているため、有機野菜の地産地消の輪が今後も広がっていくことが期待される。